

選ぶのは、子ども

田中 三保子

子どもたちが毎日幼稚園で生活している様子は、子どもによりいろいろである。一緒に生活し、世話を焼いたり要求に応えたりしていると、保育者には一人一人の気持ちや人となりが見えてくる。そしてそれぞれの子どもについて、こうあってほしい、あああってほしいという、保育者としての願いともいうべき気持ちを抱く。その願いを子どもたちにどう伝えてい

たらよいのだろうか。

ほくも、わたしも、つかいたい

三歳児の十月半ばのことである。

A子が庭遊び用のままごと道具とおぼしきものを抱えて、園庭を横切っていくのが保育室から見えた。多分あれは年中組のものだ。いつもなら（置きっ放しをそのまま）借りてその場で

遊んでくるのにどうしたのだろう、と思いが
ら、園庭に出てみる。A子は、砂場の近く、隣
の三歳児の部屋の出入り口の斜め前の場所に道
具を並べているところだった。そばにいくと、
私の顔も見ずに「B子ちゃんと遊びたい」と言
う。なるほど、B子と遊びたかったからこま
で道具を運んできたのね、と私は納得し、「そ
う。B子ちゃんはお部屋よ」と答える。A子は
それには答えず、「B子ちゃんと遊びたい」を
繰り返す。始めた場所があまり適切でないよう
な気がして言葉をかけようと思ったが、A子な
りの考えがあつてのことかもしれないと思いな
おし、とりあえずB子を呼びに行く。部屋に戻
りB子に声をかけていると、「ぎゃあー」とい
うA子の泣き声が聞こえてきた。行つてみる
と、A子は砂利の上へべたつと座りこんで泣い
ている。やはり砂場に近すぎたようだ。砂場で

遊んでいたC夫が道具を取ろうとしたらしい。
C夫はA子に背中を向け、顔はこちらをうかが
うようにして砂場のむこうはしに立っていた。
年少組には庭遊び用のままごと道具はないの
で、他の子どもたちに魅力的にみえるのは当然
である。それにしても、いつもながらC夫はめ
ざといし素早い。欲しいと思つたら手が出てい
る。A子の借りてきたのは、ガスレンジ、お
鍋、お皿、スプーンが一こずつとカップ二こで
ある。C夫に貸すだけの余裕はありそうもない
ので、今は我慢してもらうしかない。何を言わ
れるのだろうかという風情のC夫の背に向かっ
て、「A子ちゃんはね、使いたかったから今借
りてきたとこなの。もう少し遊びたいから持っ
ていかないでね」と言つてみる。そして付け加
えた。「もう少ししたら『貸して』っていつて
みて」。聞こえたのかどうか、A子をなぐさめ

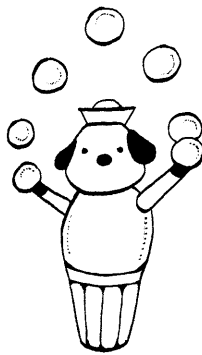
ているあいだにC夫はもうどこかに言ってしまったようだった。

この場所は砂場にも隣の組にも近すぎてあまりにも刺激的だし、座るにしても砂利が痛そうなので、引越しを提案してみることにした。

ごさを持ってきて「あっちにおうちを作りましょうか」と促すと、A子はすんなりと道具を抱えてついでにきた。大声で「やだー」と拒否されることが多いのに、今回は神妙である。そこへB子がやってきて、二人でのままごとが始まる。途端に、B子と一緒に部屋から出てきたD子が寄ってくる。続いてE子、F夫もやってきた。今度は自分の組に近すぎたかもしれない、でもあまり遠いのも目立ちにくいには違いないけれどもと思っているうちに、A子が「ぎゃあー」と泣き出した。まわりの子どもたちも遊びたくて、それぞれままごと道具に手を

出している。A子は道具を抱えこんで「だめー」と泣き叫び、相手の手を払いのけようとする。

B子にはA子の泣き声がどう響いているのだろうか。A子の向こう隣で黙々とカップにス



ブーンで砂利のごちそうを作っている。いつもならどうしたのと寄ってくるのに、ごちそう作りに熱中してしまったようである。D子はB子ならやらせてもらえろと思つたのかもしれない、B子に近づき少しずつ手を出して、結局一緒にやり始めた。B子、D子の二人はどうかやら共存できそうである。

E子、F夫は、泣き声にもめげず、A子のすぐ前でままごと道具をじつと見つめ続けている。そして、口々にやりたいと私に訴えてきた。目の前でおもしろそうなことが展開しているのだから、実にもっともなことである。しかしA子にしてみれば、B子と二人だけでこのままごとをしたかつたのだろう。しかもやっと落ち着いて始めたばかりなのである。

私はそこに座りこんでA子を膝にのせた。ともかくA子の気持ちを落ち着かせたかつた。そ

の一方で、E子、F夫にも私なりの同意の意志表示をしたい。「A子ちゃんね、これでごはん作りたかつたの。でも今始めたばかりなの。もう少しやりたいの」。E子もF夫も手は出さなくなつたが、目はお鍋に釘づけである。そして繰り返し言う。「E子（F夫）もやりたい」。

「A子ちゃん、E子ちゃんもF夫くんもやってみたいみたいよ」。膝の上のA子に呟くように言うと、途端にまた、「だめー」と泣き叫ばれてしまった。A子が落ち着くまでにはまだしばらくかかりそうである。E子たちはA子の気持ちまでは理解できないであろうから、私がこの場を離れたらまた取り合いが始まるだろう。砂場からも部屋からも何度も呼ばれているけれども、しばらくはこのまま様子を見るしかない。

私はA子も、E子、F夫もそれぞれに存分に

遊びたいだろうになあと思いながら、有効な働きかけもみつかからないままに、双方の気持ちを言葉にしてみたりなどして、しばらく時を過ぎた。そうするうちにA子もかなり落ち着いてきたようだし、砂場でひたすら私を待っているC夫にぜひとも応えたくて、私はA子をそっと膝からおろしその場を離れた。気になってたびたび振り返って様子を見ると、E子たちは我慢してA子の遊ぶのを見ているようであった。

私は少し安心してC夫の相手をしていたが、はっとして振り向くと、予想に反してそこには穏やかな光景が繰り広げられていた。向こうで二人、こちらで三人が向かい合い、それぞれ一心に何かを作っている。わずかのあいだにどう折り合いをつけたのだろうか。ほんの少しのままごと道具をどう分け合ったのだろうか。

近づいてみると、A子はお鍋一つで遊んでい

た。B子と一緒に時は道具を全部使っていたはずである。しかし今は、目の前でE子、F夫がそれぞれに何か作っているのを全く気にかけていない様子で、自分の作業に没頭している。あれほど拒否していたのにA子は二人を受け入れたのだ、とこの時私は確信した。

保育者の願いを伝える

C夫はこの事例のような行動をとることが多い。保育者としては、もう少し相手に対しても目を向けられるようになることを願う。やりたいう気持ちはわかるけれど、相手も使って遊んでいるのである。そのことをどう伝えたらわかってもらえるのだろうか。有無を言わず持っていていたり叩いたりをいけないと止めるだけでなく、C夫の思いが実現できそうな別の方法を示していくことも必要なのではあるまいか。あの

時は、A子にたとえ「貸して」と言ったとしても、実際には無理かもしれないとは思いつつも、私としては、C夫が「貸してもらおう」方向で考えるようになってほしいと願ひ、言つてみたのである。

A子はしたいこと、したくないことを頑として通すことが多かった。氣に入つた人形を抱えこみ、決して貸さない。遅く登園し、D子（のことが多い）が使つていと無理矢理取ろうとする。こういう時、D子も負けてはいない。絶対に放そうとしない。A子は「ぎゃあー」と大声で泣き、「A子のー」とわめきたてる。たいは、D子が黙つて人形をA子の目の前に差しだして一応解決するのだが、それまで泣き続ける。A子の独特の甲高い声が、その間じゅう部屋に響きわたる。

A子がその人形を頼りにしていて、どうして

も抱いていたのは痛いほどよくわかる。でも、D子だつてそうしたかたにちがいない。いつもA子に先を越されて我慢していたのだから。私はどうしたらよいのだろうか。

A子の強引さを何とか引き止め、なぐさめてみたり、D子の氣持ちを言葉にしてみたり、状況の説明をしてみたり、抱きかかえてみたり、いろいろやってみるがなかなか芳しい結果にはならない。D子は多分そんな様子を見ていて、貸してあげようと思うのだから。A子の方は、人形が手に入ればそれでいいとばかりに、けろつとして遊び始める。D子はもつと遊んでほしいのに貸してくれたのであろうに。「D子ちゃん、ありがとう。使いたいのに貸してくださったのね」。D子の氣持ちに感謝しつつ、A子にもわかつてもらいたくて私は言つてみる。

選ぶのは、子ども

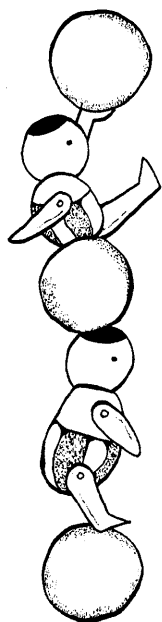
子どもたちは、それまで育ってきた環境から身につけたものの見方、行動の仕方そのままに入園してくる。環境は子どもによって異なるので、物の見方、行動の仕方それぞれである。

幼稚園で生活するうちに、子どもたちは、思いがけない反応に出会ったり今までのやり方では通じないなどの経験を通して、自分とは違う相手の存在に気づくようになる。自分と違うとい

うことは、興味を引きつけられることでもあるが、ときには脅威ともなる。

保育者としては、子どもたちが違いを受け入れ、相手を理解し、関わり合うことを楽しめる人になってほしいと願う。子ども同士が、思いやり方の違いからぶつかったりしても、いやな思いをするのではなく、相手を知りわかりあえる機会にできるような働きかけを工夫していきたい。

子どもはたいいてい目の前のことしか見ていな



い。しかも、自分の欲求とのからみでその場をみていることが多いので、まわりの様子などはあまり目に入っていない。けれども、保育者にはそれぞれの子どもの気持ちや経緯などがある程度みえている。子どもより大きな視点でその状況をとらえることができ、その場のより良い方向転換を指し示すことができる。

状況がよくわかり、解決方法が見えていると、保育者としては最善の方向へ事態をもっていきたくなる。子どもに指示したりして、知らず知らずのうちに子どもをひっぱろうとしてしまいやすい。子どもを一定の方向に導くことが一番良いと思われるときもある。しかし、行動するのは子ども自身である。子どもが自分で選択する過程を大切にしたいと私は思う。子どもなりにいろいろ考えられるように、保育者の立場からの考えは選択肢として示し、最終決定は

子どもに任せたいと思う。

最初の事例においても、C夫は、思わず手を出してしまったものの以前のようにぼっと逃げ出さなかった。彼なりに思うところがあつたのだろう。その場にとどまることを自ら選択している。また、A子は自分の考えで共存の道を選んだ。そこに至るまでには、その後述べたようなことが繰り返され、かなりの時間を必要とした。しかし、時間がかかろうとも、子どもが自分で選んだということはそのこと自体が意味のあることなのだと思う。子どもが納得して選んだことはその子のものとなり、その子自身を変えていく。子どもが自分で選択し、自分を変えていく力を私は信じている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)